



JF 食材・产品 フェア 2002

農産物需要企業にとっての“農薬問題”

生産者に求めるべきこと、需要者が問われること

外食産業の全国団体である(社)日本フードサービス協会主催の「JF食材・产品フェア2002」が去る11月13、14日の2日間、東京都内の都立産業貿易センターで開催された。外食産業の食材仕入担当者、開発担当者など5811人が来場している。

★当社出展情報

●展示パネル「農薬は誰のため?」

同展示会に毎回出展している当社ブースでは、「農薬は誰のため? 理念と技術と情報開示の共同作業」をコンセプトとしたパネル展示が行われた。これは、「有機・無農薬を超えて、生産者と消費者が安心を共有する新しい時代の農産物マーケティングの時代が始まっているのではないか」という前回(一昨年)のコンセプトを受けてのものとなる。今回の無登録農薬問題について、生産者と消費業界が共に農薬について正面から考へることの必要性を再度訴えた今回のパネル展示に、訪れていた外食業関係者たちも高い関心を示していた。また、当社企画のセミナー「農産物需要企業にとっての“農薬問題”」では、多くの参加者がメモを取りながら耳を傾けていた(次ページ参照)。

0円にて販売しているので、購入希望の方は 0120-555-184までお問い合わせいただきたい。

●読者の農産物展示と商談

また当社ブースでは、「農業経営者」読者の農産物が展示された。出展者数46、出展商品数68、うち10の農家・団体が当社ブース内で積極的な営業活動を行い、200社以上の外食を中心とした来場企業と商談を行った(写真参照)。



定価500円(税込)

●新野菜プロジェクト

種苗開発企業には、農産物需要業界の要望をタイムリーに反映させながら開発を行っていきたいというニーズがある。また農産物需要業界には、スーパーの棚やレストランのメニュー・家庭料理から逆算して最適の品種と最適な生産者を選んで計画調達を行っていきたいというニーズが存在している。その両者のニーズを「農業経営者」読者たちの優れた生産・経営技術とつなぐことで、新たな農産物マーケットを作り出していくこうというプロジェクトである。本特集をまとめたもので、特に買い手企業の人々に農薬取締法や農薬登録制度の現状、適用外使用等の問題点について知らせたいという人々に最適の冊子である。1部50

「農業経営者 号外 農薬は誰のため?」を発行

「農業経営者」では、同展示会に合わせて「号外 農薬は誰のため?」を発行・有料配布した。本誌10・11月号の農薬関連特集をまとめたもので、特に買い手企業の人々に農薬取締法や農薬登録制度の現状、適用外使用等の問題点について知らせたいという人々に最適の冊子である。1部50



JA長野八ヶ岳支所



三枝農園



和楽堂健康農園



株ライスアイランド



株村上農園



JF食材・産品フェア2002

農産物需要企業にとっての“農薬問題”
—生産者に求めるべきこと、需要者が問われること—



(農)和郷園



(有)蓼科美人



ノース・ベスト・ファーム(有)



岩武果樹園



(有)JAVU

JF食材・産品フェア2002 併設セミナー

農産物需要企業にとっての“農薬問題”

—生産者に求めるべきこと、需要者が問われること—



【パネラー】

西田立樹（「農薬ネット」主宰者）

澤浦彰治（株式会社野菜くらぶ代表取締役社長）

伊東 清（株式会社モスフードサービス 商品本部 アグリ事業部 エキスパートリーダー）

【コーディネーター】

昆 吉則（「農業経営者」編集長）

昆 先のBSE問題の発生以来、さまざまな農業および食の流通業界における不祥事や業界内の悪弊が次々と暴かれ、お客様の間に「信用恐慌」とでもいうべき不安感をもたらしています。その後、中国産冷凍野菜の残留農薬や、国内の無登録農薬問題の報道が相次ぎ、さらにその不安は増しました。各産地では、その地域の農産物が販売できない事態も発生して、混乱を極めています。

その結果として農薬登録やその取り締まりに関する法規上の問題が話題となりました。しかし、ここで皆さんに認識していただきたい点は、実は農薬登録というものは、ある剤の安全が確認されているかどうかということだけでなく、どの作物に対して適用登録を取るのかを決めるシステムになっています。たとえばトマトに登録していてもナスに登録がなければ、その農薬をナスに使用することは違法となりうる制度なわけです。もちろんトマトやナスはメジャーな作物でそれらに適用されている農薬の数もたくさんありますが、これが、ズキン一二やチコリ等の作付け面積の少ない作物になると、登録農薬は全くないか、ごく限られた数になってしまふのが現実なのです。農薬メーカーとしても、採算性という点から、一作物で数百萬

円から一千万円以上もかかる登録拡大をマイナー作物に広げていくことは難しい状況にあります。私共の雑誌では、農水省に対して「現状では適応登録はされていないが同類の作物に登録の取れている農薬を使っても摘発はしないか?」という聞き取りをしながら読者に広報しています。また、こうしたことをするのは、何らかの形で登録の取られている農薬を適用外の作物で使用するという点については、本来、登録はないけれども、摘発の対象にはしない方向だということを、農水省から確認した上でやっていることなのです。しかし、これは、厳密に言えば法のおぼしを確認しているに過ぎないのです。

ところで、買い手の皆様から農薬の

使用履歴を情報公開してほしいという要望が多く出されております。また同時に、農薬取締法を遵守することを誓約書として提出せよという買い手さんも少なくありません。しかし、それでは農薬取締法の矛盾あるいは農薬登録制度の問題から、厳密に言えば無農薬で作らない限り違法になってしまいます。いう作物も少なくないという現実も買手の皆さんによく理解していただきたいのです。さらに、より低リスクな農薬が開発されていいたとしてもその作物に登録されていない限り、その作

物をマイナー作物に広げていくことは難しい状況にあります。私共の雑誌では、農水省に対しても「現状では適応登録はされていないが同類の作物に登録の取

れる農薬を使うことも違法です。それは、安定供給ということだけでなく、お客様の安心を保証していくとという面からも問題があるのです。



西田立樹

(にしだ・たてき) 農薬メーカー社員。農薬についての正しい知識を広めようと「農薬ネット」(<http://noyaku.net>) を主宰。農薬のリスクとベネフィットの問題、農薬と人間、社会の問題について解説。平易な言葉と文章を用いた鋭い指摘には定評があり、アクセス急増中。

スクな農薬を使うことも違法です。それは、安定供給ということだけでなく、お客様の安心を保証していくとという面からも問題があるのです。さらに、外食業界からは新メニューの開発のために、新しい野菜を作つて欲しいというご要望も多いかと思います。産地の限られた伝統野菜といったものを含めて、そういった作物は量もあまり作られないですから、その場合も登録農薬はないものがほとんどなのです。

農薬の登録は農薬メーカーが行います。メーカーによってその作物に登録拡大されない限り登録適用外使用ということになるのです。そして、矛盾に行政が消費者に軸足を移してというのであれば、農薬技術や登録制度が生産の安定というより食の安心をこそ問われていく時代に、ただ農薬メーカーだけに農薬の登録を任せておく時代ではないのではと考えるわけです。むしろ、消費者の方々がお客様に対して安心を保証していく当事者として、農薬登録の問題に積極的に関与し、農薬登録拡大に力を貸していただきたいと考えるわけです。

情報公開は進めていかねばならない。その前提として、今ある農薬に関する様々な問題がきちっとした形で整理されなければならぬはずです。そしてそのためには、作り手、売り手、お客様も含めた共通の認識を持つ必要がありますのではないかと考え、今回のような催しを呼びかけた次第で

満ちた農薬登録制度の中での情報公開や法の遵守の誓約は(それ自身否定すべきものでないにしても) 生産者の立場では大きな問題を抱えることになるのです。また、そのことが誠実な情報公開やそれを前提にした消費者の安心を損いかねないのでです。

しかも、農業業界とは売上金額3千億円に過ぎない小さな業界なのです。一方、消費業界は外食業界だけでも27~28億円の売上がある業界です。農林省は農業技術や登録制度が生産の安定というより食の安心をこそ問われていく時代に、ただ農薬メーカーだけに農薬の登録を任せおく時代ではないのではと考えるわけですね。むしろ、車は安全か。交通ルール、運転免許制度、道路整備等々……様々な要素を複合して考へると、自動車の安全性は増していると言えると思います。しかし、交通事故で年間数10万人がケガをして、数千人が亡くなっているのも事実なので、完全に安全で安心だとは言いません。

交通事故は危ない、排気ガスを吸って息苦しいのはよくない。これらは車の持つリスクですね。「車がないほうがいいじゃないか。やめちゃおうよ」と言うこともできる。けれども、どこに行くにも歩かないといけないし、トランクが動かなければ流通もストップするでしょう。人は交通事故や環境汚染のリスクと引き換えに、人の生活にとって大事なものを得ている。つまりリスクとベネフィットを秤にかけて、トータルとして車の存在を認めているから、ある程度安心して生活でき

●リスクとベネフィットを天秤にかけよう

西田 消費者は農薬を見たことも触ったこともないので、まず、分かりやすくするために、農薬を身近なもの(=車)にたとえてお話ししましょう。

まずは農薬について、西田さんに基本的な問題の解説をお願いしたいと思います。

安全と考えられます。いろいろな分析結果を見る限り、人体に悪影響を及ぼすことのない基準値（残留基準値）を超える農薬が検出される確率は0・0何%のオーダーですから、万に一つですね。

そして車と同様に、農薬にも大きなベネフィットがあります。農薬がなかつたら確実に農作物の収穫量は減りま

が、中にはボロボロの車や暴走族も走っている。またちゃんとした車で50キロ制限の道を100キロで走つたり信号無視しているヤツもいる。

農薬には一定の使用基準があつて、皆さんの安全を保証するという前提に立っています。しかし、すべての農家が使用基準を守つているかというと

同じように、農薬には基本的に毒性があります。しかし、私たちの口に入れる作物の段階で、その毒性を発現するだけの農薬が付着して、なければ一応

車と農薬の「リスク(危険性)」と「ベネフィット(便益)」の比較

	車	農業
急性毒性	交通事故、自殺	散布中の事故、自殺
慢性毒性	排ガスによる喘息、発ガン性	発ガン性、催奇形性
公害	騒音、悪臭、大気汚染、地球温暖化	生態系への影響、残留
その他	暴走族、渋滞ストレス、犯罪に利用	農村文化の衰退、犯罪に利用
効率化	大量輸送、高速輸送、コストダウン	大量生産、安定生産、コストダウン
健康	安全、移動労力の低下	食生活の多様化、農作業労力の低下
余暇	観光、レジャー、車趣味	農家の余暇拡大、食生活の多様化
その他	経済拡大、防災、自動車文化	経済拡大、農地保護による環境保全

※農薬ネット(<http://www.nouyaku.net>)より

す。餓死者が出るという極論もありま
すし、農作物の価格も上がるでしょう
外食業が成立しにくくなる。農家の
立場で考えると、雑草がボーボー生え
てくる。炎天下で何時間も抜くのはし
んどい。除草剤を使うことで、重労働
から解放されるし、日射病にならない
腰が曲がらない。農薬の存在によつて
そういうリスクから解放される。トー
タルで見たらそちらの方が重要なわけ
だ。

消費者には、「まったく農薬を使わないでほしい。農薬を食べずにすむし自然環境にもいい」という人もいます。が、その一方で、普通に栽培した作物が世界の食料を支えているのも事実です。それなしでは、ある種特殊なマーケットとなつてきている日本の有機栽培も成り立たないでしょう。

残念ながらその通りとは言いがたい状態です。今回の違法農薬の問題は、これに該当するものだと思います。

車同様に、農薬にはリスクだけでなくベネフィットもある。残念ながら中には規則違反の人たちもいるが、それを使用する人たちの大半は規則を守っている。ですので、ちゃんとリスクとベネフィットの両方を天秤にかけて考えてほしいのです。今の農薬に対する世間の安全志向は、車をなくせとか交通事故をゼロにしろというのと同じレベルなのではないか、というのが私のからの問い合わせです。

車同様に、農薬にはリスクだけでなくベネフィットもある。残念ながら中には規則違反する人たちもいるが、それを使用する人たちの大半は規則を守っている。ですので、ちゃんとリスクとベネフィットの両方を天秤にかけて考えてほしいのです。今の農薬に対する世間の安全志向は、車をなくせとか交通事故をゼロにしろというのと同じレベルなのではないか、というのが私のからの問い合わせです。

裏返しを狙つたマーケティングが流行りすぎていたように思います。これからはその不安をどう解消していくか皆で考えていくことが必要なのだと思います。そのためには、知識を広め情報を公開していくことが必要です。それには農薬の「リスクとベネフィット」という考え方を多くの方にとつての共通認識としていただきながら、議論していくべきだと思います。

そこで、農薬の問題を単に農業生産の問題としてではなく、消費サイドの問題としても考えていただけないかということでお、澤浦さん、伊東さんに、出で、ござりますので、よろ

そこで、農業の問題を単に農業生産の問題としてではなく、消費サイドの問題としても考えていただけないかと
いうことで、澤浦さん、伊東さんに、
ご出席いただいておりますので、よろ
しくお願ひします。

澤浦彰治

(さわうら・しょうじ)
嵯野菜くらぶ代表取締役社長。群馬県昭和村を中心に、生産者の出荷グループを形成。独自の栽培基準を設け、モスフードサービス、生協などに農産物を提供。提携先企業の農業研修も積極的に受け入れている。

● 農薬問題は経営問題だ

澤浦 私は群馬県昭和村を中心し農業をやつております。グリーンリーフという別会社で25haの野菜栽培と漬物加工、こんにゃくの製品加工をしてい

私たちには、安心と安全は別だと考えています。お客様に安心していただくためには、自分たちがどういったスタンスで農業をしているのかということを、できるだけ正確に伝えていくしかないと思っています。野菜くらぶのHPを見ていただくと、栽培の中で問題となつた病害、その対策としての使



用農薬リストや栽培基準を見ることができるようになっています。そのリストの中でも、この農薬は使ってほしくないと言われるお客様もいます。そういう場合は「その農薬は使わないことにしましょう」というスタンスでやつております。これには賛否両論あるかと思いますが、お客様が使つてほしくないものを、わざわざ使う必要はありませんが、私たちの考え方です。無茶なことをいつてくる場合もありますがその場合は、「それはできません」というのが私たちの考え方でせんよ」とちゃんとお答えするようにしています。あるいは「できるとしている」、コストがかかりますがお客様見合うんですか」とお話をさせていただいている。

んにもつとよいものを届けるにはどうしたらいいかと考えていけば、自然と農薬の使用量は減っていくものだと私は感じています。

伊東 清

(いとう・きよし) 株式会社モスバーガー フードサービス 商品本部 アグリ事業部 エキスパートリーダー。モスバーガーは、1500店舗で使用する青果物の仕入れと安全確認を担当。産地へ足しげく通い、取引をすると同時に、店頭で生産者の顔を示しながら安全な野菜を提供することに日々尽力している。

農薬の使用量は減っていくものだと私は感じています。

青森に今農場を準備しています。これには大きな理由があります。レタスを例にとりますと、昭和村では5~6月、9月中旬~10月にはすごくよいレタスが取れます。その時期は安定して棚もちが悪かつたりとお客様にどこかで迷惑をかけていた経緯があるのであります。そういったときには、当然農薬の使用量も増えるわけです。相対的にコストを下げるためには、どうしたらよいの

● 買う側の論理だけでは
問題は解決しない

伊東 モスフードサービスの伊東と申します。JFの会員企業でございます。全国に1500店舗ほどモスバーガーというハンバーガーチェーンを展開しております。私は店舗で扱う農産物の仕入れを担当しております。

かと考えれば、やはり農業は適地適作で気候のよいところで栽培を行えば、同じ野菜くらぶという考え方の中でも、地域を越えてリレー栽培をして供給で、くるぶ全体の農薬の使用量は減っていきます。それは私たちにとってコストダウン、お客様にとって安全、安心につながるものもあるのです。

開業當時、当社は「新鮮な野菜を手に入れるには、近くの八百屋さんにもつてきてもらうのが一番」という考え方で仕入れを行っていました。しかしお客様の舌が肥えてくると「今日のタマネギはちょっと味がへんだね」とか、「トマトはちょっと甘味が足りないね」といったご意見が出始めてきました。そこで今から約10年前に、自分たちで理想の農産物を手に入れようとプロジェクト

歩くうちに澤浦さんのグループと出会
い、直接契約しました。約6年前のこ
とです。当時は1500店がそれぞれ
八百屋さんから直接仕入れていたので
すが、それを八百屋さんではなくフラン
チャイズ本部が各店に供給すること
になり、多少の混乱があつた時期でも
ありました。最初、澤浦さんたちとは
トマト20ケースぐらいのスタートだつ
たのですが、澤浦さんから「もうモス
バーガーとはやれない」と言われまし
て、3日で終わってしまいました(笑)。
産地と直接契約を結ぶのは難しいなど
感じました。しかし、今までどおり自
分たちの要望が伝わらないものを求め
続けるのは悔しい。色や形ではなく
“味”を手に入れたい。なんとか翌年、
澤浦さんたちと再度話し合いをして契
約ができました。買う側の論理だけで
品質、量、価格を要求するだけではダ
メだなどそのとき感じました。納得の
いく野菜を手に入れるには、どうすれ
ばいいのか。澤浦さんのグループのト
マト農家6軒で、1日1軒ずつ汗を流
そう。会社からいわれたわけではなく、
自らそういう経験をして、初めていろ
いろな問題点が見えてきました。約5
年前のことです。それ以降、全店で栽培
プロセスの分かる農産物を扱ってい
こうと取り組んでおります。

歩くうちに澤浦さんのグルーパと出会
い、直接契約しました。約6年前のこ
とです。当時は1500店がそれぞれ
八百屋さんから直接仕入れていたので
すが、それを八百屋さんではなくフラン
チャイズ本部が各店に供給すること
になり、多少の混乱があつた時期でも
ありました。最初、澤浦さんたちとは
トマト20ケースぐらいのスタートだつ
たのですが、澤浦さんから「もうモス
バーガーとはやれない」と言われまし
て、3日で終わつてしましました(笑)。
産地と直接契約を結ぶのは難しいなど
を感じました。しかし、今までどおり自
分たちの要望が伝わらないものを求め
続けるのは悔しい。色や形ではなく
“味”を手に入れたい。なんとか翌年、
澤浦さんたちと再度話し合いをして契
約ができました。買う側の論理だけで、
品質、量、価格を要求するだけではダ
メだなどそのとき感じました。納得の
いく野菜を手に入れるには、どうすれ
ばいいのか。澤浦さんのグループのト
マト農家6軒で、1日1軒ずつ汗を流
そう。会社からいわれたわけでなく、
自らそういう経験をして、初めていろ
いろな問題点が見えてきました。約5
年前のことです。それ以降、全店で裁
培プロセスの分かる農産物を扱ってい
こうと取り組んでおります。



JF食材・産品フェア2002

農産物需要企業にとっての“農薬問題”
—生産者に求めるべきこと、需要者が問われること—

と、お客様は「農薬」を非常に嫌います。「モスバーガーで扱っている野菜は、無農薬なんですね」という質問が一日一件ぐらいは上がつてきます。私が、「そうじやないんですよ。農薬にもいろいろなものがあつて……」と説明すると「なんだ。結局使っているんじゃないのか」と言われてしまう。冬場に販売しているリンクのギフトセットに関しても「モスさんのリンクは、無登録農薬を使ってないですよね」という質問が多数ございました。

農薬を一回でも使えば、「なんだ、大したことないじゃないか」と言われてしまふ。きちんと説明しようとしている、聞いていただけない。そこが一番つらいところです。

お客様がお店でお昼のランチを召し上がるっているとき、テーブルに「今日使っているレタスは○○の農薬を○回撒いてます」と書いてあつたら、おそらくその場で食べる気をなくすと思いません。そのアナウンスの仕方が難しい。店頭で難しければ、HPできちんと説明していくしかないでしょう。

今現在その準備をしておりまして、従前から产地の方には、栽培歴、防除歴を含めて農業資材に関しての情報はすべて提出いただいております。それがようやくデータベース化されまし

た。今後、その精度を高めていきなが

ら、その中で公開できるものを徐々に増やしていきたいと考えております。難しいことだらけで、やればやるほど問題にぶつかるのですが、その分提供私に、「そうじやないんですよ。農薬にもいろいろなものがあつて……」と説明すると「なんだ。結局使っているんじゃないのか」と言われてしまう。冬場に販売しているリンクのギフトセットに関しても「モスさんのリンクは、無登録農薬を使ってないですね」という質問が多数ございました。

西田 モスバーガーの店頭に「イミダクロプリド3回使いました」とか書いてあつたら、私が消費者だとしてもイヤだな。ある程度農薬使うのは仕方ないと分かつていても、店頭にズバリと書いてあつたら、ちょっと引きますよね。

野菜くらぶでは現在新しいシステムを開発しているのですが、それは単に情報公開というより、自分たちの農業経営に反映するためのシステムです。気象データや収穫量、栽培期間、生産者、肥料代、コスト……全部把握できるようになつていて。将来的には2週間先の出荷量まで正確に読めるようになります。最悪「伊東さんすいません。2週間後にレタスなくなりそうなん

とはいえ、お客様からの質問に答えるを得ない状況であるかと思いまます。具体的に今後農薬を開示していく上で、どう対処していかれようと考えているのですか？

昆 吉則

(こん・きちのり)
「農業経営者」編集長、株農業技術通信社代表取締役社長。著書に「あたりまえの農業経営」(富民協会)がある。



聞かれたら、野菜くらぶで生産されたものであれば、ダンボールに名前が書かれていますので、生産者がすぐ答えることができます。現状でもそする側の責任は重いのだということを日々感じております。

西田 モスバーガーの店頭に「イミダクロプリド3回使いました」とか書いてあつたら、私が消費者だとしてもイヤだな。ある程度農薬使うのは仕方ないと分かつていても、店頭にズバリと書いてあつたら、ちょっと引きますよね。

野菜くらぶでは現在新しいシステムを開発しているのですが、それは単に情報公開というより、自分たちの農業経営に反映するためのシステムです。気象データや収穫量、栽培期間、生産者、肥料代、コスト……全部把握できるようになつていて。将来的には2週間先の出荷量まで正確に読めるようになります。最悪「伊東さんすいません。2週間後にレタスなくなりそうなん

私は答えられるだけなく、各店舗で説明できなければ本当の情報公開とはいえません。そんなときに役立つのはインターネットです。本部と各店舗をつなぐ内部だけのサイトがありまして、そちらで可能な限り情報を流していく。そういう方法でやっていきたいと思います。

澤浦 濤浦モスさんの店頭で「今日のレタスは、どんな栽培をしているの？」と

昆 濤浦さんがトレーサビリティを実践しながら、そればかりにこだわることに疑義を抱いておられるのは、非常に健康なことだと思います。何が安全かということは、最終的に國家が保証しなければいけないと思いません。けれども、そのとき言葉で農業はできないこと、誰によつて何のために行われているのかを問うこと。それを超えて何かをやつていくことが、必要ではないでしょうか。こういう不安を解消するのは、システムではなく人なのではないでしょうか。白と黒で分けた正義だけでなく、いろんな判断力を持つ人が共同して何かを進めていくときに、今の困難は超えられていくと思います。農薬の問題、登録や法律の問題に関しては、農業生産側だけでなく、これらも皆さんの共通のテーマとして議論していただきたいと思います。

(まとめ・三好かや)